

「さて、行くとしますか」

僕はいつものように、カブに火を入れてゆつくりと走りだす。いつもと違うのはただ一つ、目的地が最初から決まっている事。珍しく姉貴に今日来てと連絡が来たから向かつてる。向かう先は、姉貴が社長している会社。

「今回の出社は何日ぶりだろ…？」

前回行ったのが、今年の入社式だっけ？
もう、ゴールデンウィークも終わったから、一ヶ月以上行っていないのか…？
そんなことを考えながら少し走ると見えてきた。

「相変わらず大きいビルだなあ…」

本社ビルの横にある地下へのスロープを下って行き、
駐車場に併設されている実質僕専用のバイク駐輪場へ。
カブを止め、ヘルメットを片手にエレベーター前へ

「どこ行けばいいんだっけ、受付に顔出せば良いのか…？」

ぼーっと、エレベーターを待っていたら後ろから話しかけられた。

「セナ姉、待っていたよ」

「お、咲夢か。久しぶりじゃないか：早速だけど何用得僕は呼ばれたんだい？」

「ああ、そのことなら上で戀姉が待ってるからそちで話そう」

「了解した。じゃあ上に向かおうか、エレベーターも来たことだし」

エレベーターに咲夢も乗ったのを確認しつつ目的の階層のボタンを押す。

「咲夢、いつも通り社長室で良いのかい？」

「いや、役員会議室で待ってて言つてたよ」

「了解、ふむ：クビでも宣告されるのかな？」

「違うと思うよ。何で呼んだのか、戀姉に聞かなきゃ分からないけど」

咲夢と一緒に役員会議室の中で待っていると姉貴がやってきた。

「いつも通りセナ、久しぶり」

「姉貴、久しぶり、僕は何故呼ばれたのかな？」

「んー、部下を持ってみる気あるー？」

姉貴が僕に決定事項を伝えることはあるけど、頼みごとをしてくることは滅多に無い。何か裏がありそうだな…。

「…部下？ 本当にどうしたんだ姉貴」
「いやさー、人事があちこちに突っ込んでみては問題起こす子が二人いてねー」

「冷たい話だけどクビにすればいいんじゃない？」
「クビにできたら苦労しないんだよねー。セナ、滅多にテレビ見ないでしょ？」
「基本的にキャンプ場で寝起きしてるから。見ても燃料代わりに買った新聞とかかな」

確かに情報の入手手段は新聞か、咲夢からの定期的な生存確認含めた連絡だけ

「新聞見てたりするならわかるでしょ…？ うちが現役アイドル預かってるの」

「あー、なんか見た気がする。まだ預かってたの…？」

「セナ姉、流石に世間に疎すぎでしょ…」
「今年の入社式でうちに就職したんだー」

「はっ、入社式行つたけど居なかつたじゃん」

入社式、役員席から新入社員みてたけど、居なかつたはず。いや、あの日アイドルユニットが演目として踊つてたな…。

「演目でアイドルユニット踊つてたでしょ、あの二人セナ姉の部下になるから」

「咲夢、マジで言つてる？…何を教えればいいの？」

現役のトップアイドルの二人を預かる。

僕の生活がキャンプ場からキャンプ場っていう形で放浪してるの知ってるのに、僕に預けるの…？

「何でも良いよー。キャンプとかでもいいし」

「キャンプでもいいんだ…移動手段は？」

「一応、二人共普通二輪もつてるみたいだからバイクかなー？」

問題を起こす子二人を抱えてキャンプ、そして、バイクが移動手段か…。

うち系列のケーブルテレビの暇なクルー使えば安全性上がるし、話題にもな

る。教育としてじゃなくて現役アイドルのキャンプ生活とすればスポンサーとかも取れそうだし。

「咲夢、うちの番組枠どつか空いてないか確認しておいて」

「配信することによつてクルーによるアイドルの安全性を確保する気…？」

「つい、で、話題確保かな。後ろからテレビクルーが追いかけてインカムの内

容とか、キャンプの内容放送するつてどうよ」

「いいと思う、デメリットとしてはケーブルブルとはいえ、一般人であるセナ姉

が常時映ることかな…？」

「その点も大丈夫じゃない？ 昔みたいうちの芸能事務所に登録して活動すれば」

「姉貴、今の僕は単なる一般人だよ。あの時で活動は辞めたんだから」

「えっ？ セナ姉つて芸能人だったの…？」

「咲夢には言つてなかつたつけ、僕は中学の時は芸能人だったんだよ。今はもう辞めたけどね」

活動再始動つて名目でも、はいそうですかっていうわけに行かないでしょ、相変わらず姉貴がアホだ。

「戀姉…流石に雑過ぎ、まあそろそろ二人共来るよ」

「えっ、今日から…？」

部下持つ話しした直後に呼んでるつてことは…
これやつぱり決定事項だったのか…。

ノックの音が4回会議室に響いた。

「入って」

咲夢が入室許可をだした。さて、どんな子だろうか…。

「しつづれーしまーす」

「失礼します」

リクルートスーツに身を包んだ二人が入ってきた。

「こちら依藤戀（えとうれん）社長とセナ専務。二人共、挨拶して」

咲夢が僕達の紹介してくれた。

僕達を見て二人は驚いてるみたい。

誰もが知ってる企業の社長と専務にしては僕らは想像より若すぎるよな。

「始めまして Leaf Cherry Blossoms の葉月莉桜（はづきりお）と」
「同じく LCB の桜井紅葉（さくらいこうれは）です」

葉月さんと桜井さん。お互いの苗字にお互いの名前が入ってる。珍しいユニツトだ。

「やーやー、依藤戀だよー！ 気軽に戀ちやんとでも読んでくれたまえ」
「姉貴……。まあ良いか、後々後悔するのは姉貴だし。僕は依藤セナ、このダ
ルそうな顔してる奴の妹だよ。一応、今日から君たちの上司になるらしい、
気軽にセナとでも呼んでくれ、よろしく」

僕の部下になるっていう話、聞いてなかったのか混乱してるみたいだ。
姉貴、突発的に決めたな……？

「姉貴、この話二人に周知事項として知らせてあるんだよな？」

部下になる話が二人に伝わってないっていう可能性が出てきたから、念の為、
あり得ないと思うけど、姉貴に確認を取る。

「咲夢ー、どうだっけ？」

「それ、私に聞きます？ 戀姉が上司にだけ伝えといて、当日驚かせようつ
て言ってたよ」

「あ、ごめんね。二人共座つていいよ。咲夢、お茶でも淹れてあげて。んで
さ、姉貴よ何故、伝えなかつた」
「えへっ……二人共ごめんね」

そんな謝り方があるかって思うけど、その前に確認したいこと幾つか聞かないとね。

「姉貴、いつから始めるの、そもそも、二人共スーツだよ？」
「その点は私から、うちの各方面で全面バックアップで動けば夕方までには準備出来そうだけど、明日出発で良いかな。流石に、呼び出して、ハイ出発っていうのは流石に酷すぎると思うし」

それもそうだと思う、何乗るのか知らないけど、今日の僕、カブで来てるし、キヤンプグッズ何も積んでないし、スズそろそろ整備したいんだよね。

「そういえば、使うバイクどうするの？僕は自分の使うけど、スズは整備するから、カブしかないよ？」

「マジかー、ならこつちでもカブを用意しようか現役アイドルと新人アイドルが三人でツーリングする絵って面白いと思うんだよね」

「あの、番組にするんですよね…？ それならルール決めてやりませんか？スズとかでいいね獲得数×十円とかでその日の観光費がもらえる…みたいなの？」

葉月さんが面白そうなことを提案してくれた。

僕は至って平気だけど、若い子たちには難しいんじゃないかな？

「葉月さん、それって食費とか移動費はどうするのかな？」

「それは番組予算でいいんじゃないでしょうか？ あくまでも決めるのは道の駅とかでソフトクリーム食べたりする観光費なので」

「サイコロキャラメルの箱投げて行き先を決める、サイコロの旅でもいいんじゃないか？」

「僕的には、サイコロの旅は過酷だし、目的地を決めて、期限を決めて走ったりする方が近くない？」

「セナ姉とLCBの二人、片方ずつで何処から何処まで72時間でたどり着けるかとかの方がいいじゃない？」

「大前提として過酷だねえ」

一番まともなのが葉月さんの案かなあ
さて、そうすると何処のソーシャルがいいかな…。

「そういえばさ、桜井さんはどうしたらいと思う？」
「わ、私は咲夢先輩の案がいいと思います」

——時間で何処から何処まで辿り着けるか——

咲夢の案の元ネタは銀座から札幌だっけ？

葉月さんのネタも公共交通機関を駆使して現在地から行ける場所が一六に振ってあって、一度サイコロを振ったら目的地に着かないと次に進めないんだっけ。

「姉貴、最初キャンプでいいって言ってたのに、ツーリングになっちゃうよ？」

「あー、なんでもいいからねー！」

「一応咲夢の案と葉月さんの案、どっちで企画通るか会議通してみて。会議通す時誰発案かは秘密にしておいてね。トップアイドルユニットの顔色伺おうとしてくる奴は要らないから。で、葉月さん達のこれからの仕事は？」

コミュニケーションは大事だよ。無理やりはクズのやることだけだ

「いやー、今日からセナの部下だから何してもいいよー。咲夢、いつもどーりに処理して」

「戀姉：了解。給料はちゃんと払うからね、安心してね二人共」

「ありがとうございます。紅葉、良かったね」

さて、これからどうしようか、そして、何故、こんな礼儀正しい二人が問題児扱いなのか、確認しないと。

「葉月さん、桜井さん。これから何か予定あるかな？ なければちよつと僕と食事に付き合つて欲しいのだけれど、大丈夫かな？」

「私は大丈夫ですー」
「わ、私も、大丈夫ですつ」

良かった。さて、リクルートスーツとはいえ、まともにスーツ姿の二人はいとして僕の格好は、革ジャンにジーパンだからなあ。二人に任せるか。

「二人共、何処か行きたいところある？」

「私はスイーツバイキング！」

「わ、私も」

「りよーかい、じゃあ、あそこのホテルバイキングでいいかな。スイーツ系も揃つてるはずだし、姉貴、頼んだ」

「はいよ、夢何時ものところ、3枚でいいよね」

「了解しましたセナ姉はそのまま向かってください、二人は私が直接お送りします」

「んじゃ、後はよろしく。二人共後でね。じゃーね、姉貴、咲夢」

そんなこんなで部下を持ち、更に芸能活動復帰する事になってしまったわけだが、僕を知ってる人間は居るのだろうか？
いざ復活しました。だけど、大ブーイングの嵐だったら嫌だねえ：今を生きる人、アイドルユニットLCBの腰巾着みたいに見られてしまうじゃないか。あの後、何時も三人で行くホテルバイキングで二人をおもてなしして、

そろそろ企画も始動するよ！って知らせを受けて、何時ものように燃料にする前の新聞広げたら、目を疑った。
『何があつた？セナ現役復帰！』なんて見出しがある。
記事の内容に目を通すと姉貴が記者会見開いてるっぽい。
何してくれてるんですかね。姉貴は：、今度会つたらめるか。

今日は撮影クルーと一緒にLCBの二人がココに来る予定になってる。いつ来るのかは知らないけど。二人がカブになれるのを目標にしたいから、近場をS N目的の地はとりあえず二人がカブになれるのを目標にしたいから、近場をS N Sで募集しようかな。
一時間ぐらいココで時間つぶしながら募集したら数票位集まるでしょ。そんなことを考えてたらカブの独特な音が聞こえてきた。乗って来たんだあの二人。これはもう少し遠くてもいいかな？
「おはよう二人共、カブには慣れたかい？」

「めちやくちや楽ですな、カブって」

「単純におじいちゃんバイクだと思ってました。ビジネスバイクの異名を持つだけありますね。どんな条件下でも乗れそうです」

「そっか、良かった。」

さて、今日の予定とか考えなきゃね。僕だけがクルーと話しても仕方ないから、この子たちも連れて行くか。

「葉月、紅葉、ちよつと予定確認したいんだけど、プロデューサーとかいる？」

「プロデューサーですか？ あそこでうちのマネージャーと話してるのがそうですね」

葉月達のマネージャーの目の前にはなんか見たことある顔が居る……。そんな事を考えながらマネージャーの方に歩いて行くと、向こうが僕に気付いたみたい。

「お久しぶりですせんさん。復活したと聞いてどうしても会いたくなって気がついたら無理やり自身を番組にねじ込んでました。スイマセン」
「僕ね、前に君に言わなかったっけ？ そういうことすると周りに嫌われるからやめなさいって」

「当時中学生のセナさんに言われましたね。そういえば、またどうして突然復活したんですか？」

「あー、姉貴のせいだよ。部下持たない？って言われてそれが決定事項で、あの二人が僕の部下になったんだよ」

「なるほど。そういうことでしたか」

「で、今日の予定は？」

「一応このキャンプ地で一泊して頂いて、LCBの二人にもまずキャンプがどういう流れなのかを掴んでいただきたいですね」

まあ確かに、キャンプなんてしたこと無い二人だからね。カブで少し観光して買い物してここに戻ってきて、キャンプかな。

「じゃあまずインカムつけて、観光かな」

「了解です。その方向で手筈整えますね。セナさんはLCBの二人に説明お願いします」

僕は踵を返して、葉月たちの方を向いた。二人共カブを触って笑顔で話をしている。

「さて一息ついてるとこ悪いけど、今後の予定を話すよ」
「はい。どっか行くんですかー？」

「マナージャーはここでキャンプするって言ってましたけど……？」

「両方正解だよ。カブで観光して回って夕方ぐらいにここに戻ってくるんだけど、それまでにご飯の材料調達します。いいね？」

「わー！ 何処行くんですかー？」

「まだ分からないよ。クルー達が決めて、許可取りしてるから。本来は僕らが取らなきゃいけないんだけどね。さて、二人共、ヘルメット貸して、インカムつけるから」

「いや、自分たちでやりたいです。やり方教えてもらっていいですか？」

本当にこれで問題児なのか……？

それから少しして観光に出た僕ら三人はインカムで放送出来る範疇でくだらない話をしたり、
LCBの二人に歌ってもらったり、お返しに、みんなが知ってる歌ったり楽しみながらあちこちを巡った。

「二人共ーそろそろ買い物してキャンプ場戻ろっかー」
『『はい』』

「ねえ、紅葉」
「んー？」
「何処で？」
「あー、セナさんが元アイドルだったの？」
「セナさんのこと知ってたの？」
「事？」

葉月も知ってるはずだし、葉月が教えてくれたんだけどな、セナさんの事。

「葉月、中学時代に読んでたファッション誌は？」

「LanLanのこと？セナさんに関係あるの？」

「あれにさ、よくセナさん表紙飾ってたよ？」

「マジで！？えーわかんない」

「葉月が教えてくれたんだよ？まあ、明日セナさんにきいてみな？」

翌朝、私達がテントから出るとセナさんはキャンプチェアに座つてのんびり湖畔を眺めて珈琲を啜つてた。

「セナさんおはようございます」

「セナさんおはよう」

「おはよう、なんか僕だけ珈琲持つてて悪いね。起きたら珈琲飲まないと頭働かなくてさ」

「私達はテント内に紅茶持ち込んでるので、気にしないでください。そうだ葉月、セナさんに聞きたいことあったんじゃないの？」

「そうだった。セナさんつてLanLanに載ってました？」

「おお、直球で聞いてくるね。中学の時少しの間だけ読モとかしてたよ。よく僕だつて気付いてたね」

「紅葉が気付いて教えてくれたんです。セナさんがLanLanに載ってたよつて」

「気付いた時凄く嬉しかったです。ずっと前からファンで今もセナさんがアイドルしてた時に出した曲聞いたりしてるんですよ」
「懐かしいね。もう僕ら大人だよ。時間は花火のようだ」

小学校五年生位の時から読モとして載り始めて、中学生になったらアイドルとして売れて、私達のカリスマ的存在だった。
ある日を境に、パッと花火が散るようにテレビから姿を消したセナさん。
私達は「〇〇」として、セナさんとの出会い、尚且つセナさんの部下になれ、一緒に仕事する事ができる。

同級生からしたら羨望の目で見られるかな、それとも葉月みたいに皆忘れちゃってるのかな。

奥付

初版 二〇XX年〇月〇日

発行 幽玄怪社依藤工夢店 (<https://e10ulen.github.io/>)

文章 依藤 (@e10ulen)

連絡先 slcb.sena@gmail.com

印刷 RedTrain(<http://www.red-train.co.jp/>)

落丁・乱丁本は右記メールかツイッターよりお知らせください。

この本についての問い合わせも同様をお願いします。
本書の無断転載・転写等は著作権上の例外を除き、禁止いたします。

この物語はフィクションです。

特定の名称・個人・団体・事件などとは一切関係ありません。
いかなる思想・信仰・良心等を肯定、否定する趣旨は一切ございません。